

論文内容要旨

1920年代における中国知識人の日本認識の展開

--雑誌『語絲』を中心に--

東北大学国際文化研究科

国際文化研究専攻

肖 燕知

指導教員 佐野正人教授

妙木忍准教授

1920年代における中国知識人の日本認識の展開

—雑誌『語絲』を中心に—

一、問題提起

地理的な要因によって、日中両国は昔から密接な関係と頻繁な交流を持ってきた。日中両国の「近代」は、それぞれ1853年の黒船来航と1840年のアヘン戦争をきっかけに、欧米列強によって押しつけられ、不平等条約を背負ったという共通点が見られる。しかし、日本は明治維新を通して資本主義強国に変貌した一方、中国は西洋軍事技術の採用を中心とする洋務運動、伝統的な政治制度を改革する戊戌変法、専制政体を倒した辛亥革命を経たものの、列強と軍閥による圧制のもとに自立することができなかった。

1871年の日清修好条規が締結されて以後、中国官僚、知識人が日本を訪問し始め、日本への関心が高まるようになってきた。日清戦争の敗戦によって、衝撃を受けた中国人は、日本を再評価し、明治維新の役割に肯定の意を示した。政府から社会にかけて、「師日」の風潮が高まった。しかし、その風潮は長続きしなかった。1919年、パリ講和会議で、第一次世界大戦中に日本から強要された二十一カ条要求の撤廃や、山東の旧ドイツ権益の返還などの中国側の要求が拒否されたことをきっかけに同年5月4日、北京の学生が抗議デモを行った。政府がそれを弾圧した結果、市民、労働者を含む全国的な抗日、反帝国主義運動へと拡大していった。それが「五四運動」と呼ばれている。五四運動以降、中国社会の反日感情が徐々に高まり、1931年9月18日に日本の関東軍が満洲事変を起こしたことにより、日中関係はより一層悪化していく。そして1937年の盧溝橋事件を機に、日本と中国の間で日中戦争が始まり、中国人の反日感情は頂点に至った。

交通、情報の発達につれ、交流の広さ、深さが一層進んだ一方、国際状況や政府が推進した政策によって、日中両国の関係はより複雑な様相を持つようになった。そのような時代背景から、近代中国人の日本に対する認識は複雑で、変わりやすい性格を持った。近代中国人の日本認識についての研究は現在に至っても大きな課題であり、豊富な成果を見せている。いくつかの先行研究を挙げると、山口一郎の『近代中国対日観の研究¹』、王晓秋の『近代中国人日本観的变迁（近代中国人の日本観の変遷）²』などの近代中国人の日本観を全体的に整理したものがあり、鄭翔貴の『晚清传媒视野中的日本（晚清メディア視野の

¹ 山口一郎 『近代中国対日観の研究』、アジア経済研究所、1970

² 王晓秋 『近代中国人日本観的变迁』、北京大学出版社、1991

中の日本)^{3]}、焦潤明の「梁启超的日本観（梁啓超の日本観）^{4]}」などのような、特定の人物や視点から近代中国人の日本観を垣間見ようとする研究もある。近年、新聞、雑誌などのマスメディアを中心として近代中国人の日本認識を分析する研究^{5]}も増えている。

本研究では、「近代中国人」という大きな集団の中から、雑誌の編集者や執筆者を中心とした知識人の日本認識に注目したい。知識人たちは日本の文化・文学・思想に触れてきており、日本留学経験者も多く、日本の事情に対してより敏感であったと考えられるためである。そして、文学団体を結成し、文学雑誌を創刊し、記事を掲載するなど一連の文学活動を通し、知識人が自分の日本認識を訴える機会は多く、その一般読者に対する影響力も強かった。

そして、「近代」という時期の中で特に1920年代に焦点を当てたいと考えている。前述のように、1919年の五四運動以降、中国社会における反日感情が高まったが、この時期には、日本に対して客観的で冷静な観察姿勢を取っていた知識人は少なからずいた。彼らは日本の中国に友好ではない動きを認識していた一方、日本は当時アジアで唯一の資本主義強国であり、社会制度、科学技術、文化などの面で学び、参考にするべき側面が多かったことも認めていた。この時期の日本と関連がある記事では、批判的なものがあると同時に、評価するものも存在している。1931年の満洲事変の後、日中関係はより一層悪化したため、そのような日本のことを評価する声は次第に消えていった。また、五四運動の発展や、新文化運動において主要な障壁であった『新青年』が1921年に同人雑誌から共産党の機関誌へ転向したことをきっかけに、創造社、新潮社、語絲社、未名社などの文学団体が成立し、様々な同人雑誌を創刊したことにつれ、新しい思想と文学形式の伝播及び論争のためのプラットフォームを提供し、当時の中国文学界に多様性をもたらした。

以上により、1920年代の中国知識人の日本観は、代表的であり、詳しく探求する価値があると考えられる。その中で、本研究で取り上げたい代表的な一群が雑誌『語絲』を創刊した文学団体の語絲社である。

二、研究対象

雑誌『語絲』は1920年代後半に中国文壇において大きな影響力を持った刊行物の一つで、

^{3]} 鄭翔貴 『晚清传媒視野中的日本』、上海古籍出版社、2003

^{4]} 焦潤明 「梁启超的日本観」、『近代史研究』、1996

^{5]} 例えば、宋茜茜の『『申報』の日本観（1872年－1895年）』（河南大学、修士論文、2014）、方宇の「民国时期《日本研究》月刊的日本认识」（南開大学、修士論文、2014）など。

雑文、随筆、時評などの散文を主とした文芸雑誌であった。本誌は1924年11月17日に孫伏園により創刊され、5巻260期にわたる刊行が行われた後、1930年3月に廃刊になった。本誌は1927年10月に張作霖の奉天派によって閉鎖されたため、本拠地が北京から上海へと移された。そのため、『語絲』の刊行期間は大きく「北京時期」と「上海時期」という二つの時期に分けて検討されることが多い。また、『語絲』の事実上の編集長は、北京時期は周作人、上海時期は魯迅、柔石、そして李小峰が順番に担当している。

魯迅、周作人をリーダーとして、錢玄同、劉半農、林語堂らが主な執筆者である語絲社は、五四運動の退潮期にあつて、重要な文学団体である。創刊した雑誌『語絲』は当時かなりの影響力をもっただけではなく、彼らがつくった「語絲体」という社会や文化批判を重んじ、犀利な筆致で簡潔で自由に書く文体が、中国での近代的散文の確立に大きく貢献した。語絲社の代表者であり、『語絲』の編集長を務めた魯迅、周作人はある程度日本文化の影響を受けたが、それぞれの日本観や日本文化における注目点は異なった。ほかに、『語絲』の後期の主な投稿者である李少仙、韓侍桁なども日本へ留学したことがあり、彼らの文学創作、社会への批判などから、日本に対する見解や日本文化への吸収の違いが見られる。

1920年代以前に、日本語から翻訳された著作は主に社会経済、法律などに注目したものが多く、文学の翻訳は極めて少なかった。1920年代以降、多くの留日学生の努力によって、日本文学が人々の視野に入ってきた。その中でも、日本文化、文学の翻訳・紹介の面において、『語絲』は大きな役割を果たした。翻訳・紹介文のほかに、随筆、雑文の中でも日本に関するものが多く、中国の社会現象や事件に対する評論の中で、日本に言及したものも少なからずある。朱琳は260期の『語絲』における全ての外国と関連がある記事を統計し、国によって分類した結果、日本と関連がある記事は155篇があり、外国と関連がある記事の総数の38%を占めており、第二位のフランス(55篇)を大幅に超える⁶。ことを明らかにしている。この統計データから見ると、『語絲』が外国の中で最も関心を寄せていた国は日本だと言っても過言ではないだろう。日本文化、国民性について語るものなどから、『語絲』における多元的な日本認識が見られる。

三、先行研究と研究方法

⁶ 朱琳 「『語絲』における日本像——資料紹介を中心に」、『比較日本文化学研究』第4号、広島大学大学院文学研究科総合人間学講座、2011、p. 117

1、先行研究及び問題点

日中両国において魯迅、周作人の日本認識や日本文学、文化との関係の面についての研究が多様な角度から行われ、非常に豊富な成果が残されている。しかし、語絲社の他のメンバーと『語絲』という雑誌全体の日本認識に関する研究は比較的少ない。『語絲』及び語絲社主要メンバーの日本認識に関する主な研究成果は以下のようである。

陳離の博士論文「語絲社研究（語絲社研究）⁷」では、雑誌『語絲』の創刊から廃刊までの経緯や、語絲社と新潮社、未名社など同時期の文学団体との関係を詳しく紹介した。『語絲』の全体的な状況を把握するための貴重な資料であるが、その中で日本に関する記事や語絲社メンバーたちの日本認識についてはあまり触れておらず、より深めるべき点があると思われる。

朱琳の「中国近代白話文学に見える日本——北京時代の『語絲』を中心に⁸」では、国際的な文化交流の視点から『語絲』の全体像を言及した上で、北京時代の『語絲』（1924. 11—1927. 11）を中心に、当時の中国文学者たちの日本認識、及び日本文学が中国に与えた影響について検討している。しかし、例として取り上げたのは周作人と魯迅の記事だけで、周氏兄弟の日本認識しか詳しく分析されていない。また、『語絲』での「社会時評」を論じる部分では、日本の文化侵略に対する批判を内容とする記事しか分析されていない。実際に、虎ノ門事件⁹、五・三〇事件¹⁰など当時日中両国で発生した重大な社会事件に対する評論もいくつか存在しているため、多方面から『語絲』の同人たちの日本認識を検討するためには、それらの記事も看過できないだろう。

張鉄栄の「周作人“語絲时期”之日本观（周作人の『語絲时期』の日本観）¹¹」では、周作人の「語絲时期」における日本文化の伝播及び日本に対する認識を紹介した。周作人はまず日本の文学芸術を紹介し、「語絲时期」に『古事記』、『徒然草』などの日本古典の名

⁷ 陳離 「語絲社研究」、復旦大学、博士論文、2005

⁸ 朱琳 「中国近代白話文学に見える日本——北京時代の『語絲』を中心に」、『国際文化研究』第18号、東北大学国際文化学会、2012、p. 85

⁹ 大正一二年（一九二三）一月二七日、摂政裕仁親王が第四八帝国議会開院式に向かう途中、虎ノ門付近で、無政府主義者難波大助に狙撃された事件。弾丸ははずれ、難波はその場で逮捕、翌年処刑された。（『日本国語大辞典』、小学館）

¹⁰ 1925年中国の上海（シヤンハイ）で起こった反帝国主義運動。この年労働運動高揚の中で5月15日、上海のストライキ中の日本資本内外綿工場で労働者顧正紅が日本人職員の発砲で死亡する事件が起こり、30日それに抗議するデモに租界当局が発砲、死者10余名を出した。運動は上海総工会の結成、6月1日全市のゼネスト、学生スト、商店の閉店ストに拡大、さらに香港（ホンコン）・広東（カントン）の26年10月まで続いた〈省港スト〉に発展し、国民革命期労働運動の頂点をなす。（『世界文学大事典』、集英社）

¹¹ 張鉄栄 「周作人“語絲时期”之日本观」、『魯迅研究月刊』、1994

著を集中的に訳し、政治を超える「純文学」という観点から日本文学を紹介したと述べている。一方、彼は北京で発行されていた中国語新聞であり、日本側の機関紙とも認められていた『順天時報』に掲載された誤った記事や故意に事実を歪めた記事を批判したことから、彼の日本に対する態度は複雑で、多元的であると結論付けている。しかし、この研究では、周作人が『語絲』の編集長を務める時期（北京時期）に書いたものしか取り上げられず、上海時期の日本認識はあまり触れていない。また、『語絲』のほかに、周作人が「語絲時期」に『京報副刊』、『北新』などの新聞雑誌で発表した記事についての検討は欠けている。

2、本研究の視座と研究方法

上述のように、既存の『語絲』に関する先行研究には全体的な状況に焦点を合わせるものが多く、日本認識の視点から分析するものは比較的少ない上、魯迅と周作人しか例として取り上げず、他の執筆者が書いた記事についての考察が欠けていると言わざるを得ない。以上の研究状況を踏まえ、本研究は先行研究の不足点を補いながら、『語絲』での日本に関する記事の分析・解説を通して、『語絲』での全体的な日本認識を明らかにしたい。また、『語絲』に反映された日本認識を解説することを通じて、新文化運動の退潮期にあつて、日本文化が中国に与えた影響や近代日本文学、思想の中国での伝播過程をより深く理解することを目指す。

本研究で使用する資料は、語絲社が発行する雑誌『語絲』を中心とする。本誌の全体像を把握するために、まずは、朱琳の論文「『語絲』における日本像——資料紹介を中心に」¹²の中で提示された記事分類の仕方を参考にし、「政治・社会」と「文化・文学」という二種類に絞って本誌に掲載された日本関係の記事を分類して統計する。そして、数量的分析を行い、時期によって記事の掲載状況の変化を捉え、それぞれの特徴を掘り出して分析を行う。また、その特徴を際立たせるために、内部比較も行う。例えば、第四章では、上海時期の『語絲』に掲載された日本文学翻訳の記事と、北京時期と比較することによって、その変化と特徴を把握する。本誌以外に、執筆者たちの同時代の他の文学活動の記録も併せて利用する。

四、研究内容と結果

¹² 朱琳 「『語絲』における日本像——資料紹介を中心に」

1920年代は、五四運動を経てから中国社会での反日感情が高まりつつあった時期である一方、日本の文学と思想が中国に紹介され、文化的な交流が盛んだった時期でもある。その中で、知識人が果たした役割は看過できない。従って、この時期の中国知識人が日本についてどのように認識したのかを検討することによって、日中関係の歴史的な側面を理解できると考えられる。

本研究は、1920年代後半に中国文壇において影響力を持った同人雑誌『語絲』に注目し、「政治・社会」と「文化・文学」という二つの方面から、雑誌全体及び編集長や主要執筆者など雑誌の性格に影響を与えた人物の日本認識を考察した。そして、本研究の特色は、魯迅、周作人のような文学名家に限らず、なるべく多くの執筆者が書いた記事を取り上げ、『語絲』同人の日本認識の考察を試みた点である。以下、各章での分析によって明らかとなったことを要約しながら、内容を整理していきたい。

第一章「近代中国における日本認識の形成」では、まず予備的な考察として、清朝官僚、マスメディアの代表である『申報』、留日学生、知日派知識人という四つのグループに注目し、日清戦争前後の中国での主な日本認識について検討した。洋務運動期間に清政府が派遣して日本を遊歴・訪問した官僚の言論及び『申報』の日本と関連がある記事から、日本と明治維新への理解が浅いことと、当時の社会で中華思想が根深く存在していたことが窺える。つまり、近代中国における日本理解を深める土台がまだ築かれていない状態であった。その後、日清戦争の敗戦で衝撃を受けた中国社会では、「師日」の風潮が広がり、日本への留学ブームが巻き起こった。留日学生の中で、文化的に日本に親しむ者がいるものの、留學生活で遭遇した差別と侮辱によって、次第に日本に対して嫌悪感を覚える者も存在している。一方で、黄遵憲、戴季陶と周作人をはじめとする本格的に日本を研究する者も出現したため、この時期での「親日」と「反日」の感情が交錯した中国人の複雑な日本認識が窺える。

次に、1920年代中国文学界の状況を踏まえ、『語絲』の創刊の経緯を検討した。1921年7月、それまで新文化運動をリードしてきた『新青年』が中国共産党の機関誌となることによって、新文化運動は退潮することになった。魯迅、周作人、錢玄同などの『新青年』の元同人たちは文章を発表するプラットフォームを失った状態であったため、孫伏園は『晨報』に付随する刊行物『晨報副刊』の編集長を担当した後、積極的に元の『新青年』の同人たちに原稿を募集した。しかし1924年10月24日、『晨報』の編集長代理である劉勉己が『晨報副刊』に掲載する予定だった魯迅の記事「私の失恋」を勝手に却下したことによ

って、孫伏園は激怒して『晨報副刊』の編集職を辞め、自分で刊行物を作ろうと考えた。この「投稿却下事件」をきっかけに、魯迅、周作人らは孫伏園の提案を受け、同人雑誌『語絲』の創刊に力を貸した。「投稿却下事件」と孫伏園の行動は『語絲』創刊の直接的な原因と考えられるが、新文化運動の退潮期において、『新青年』や『晨報副刊』など自由に言論を發表できるプラットフォームを失った以上、新しい陣地を作ることが必要となった。これは『語絲』が創刊された根本的な原因だと考えられる。

第二章「北京時期の『語絲』(1924. 11-1927. 11)での日本認識」では、北京時期の『語絲』の性格を踏まえ、掲載された日本関係の記事に基づいて、そこに反映された日本認識を考察した。記事内容によって「政治・社会」と「文化・文学」に大別して統計した結果、社会批判と文化交流の両立を行うことが、北京時期の『語絲』の特徴の一つであることを明らかにした。

「政治・社会」に関する記事から見れば、『語絲』は日本に対して基本的に否定的な態度を取っていたことがわかった。『語絲』の同人たちは、日本から中国が受けた内政干渉と文化侵略に対して、言論を通して批判を展開した。特に中国人のふりをしたり、中国の思想解放と革命運動に不利な世論を作ったりする『順天時報』は、最も批判の対象とされた。他に、日本で発生した重大な社会事件にも注意を払い、そこに反映された日本政府の姿勢や、忠君愛国思想、武士道などを批判した。そこには、当時日本の社会状況と社会意識を中国人に紹介するとともに、今後の日本の動向に注視すべきという目的があると考えられる。その一方で、日本への批判が多数を占めた『語絲』の社会時評の中で、中国民衆の反日感情に左右されず、中国人へ内省を促し、真の日本の姿を理解することを呼びかけた記事も散見された。そして、日本文化の紹介、日本文学の翻訳や評論などを内容とする記事も少なからず掲載されたことから、肯定的な一面も見られる。周作人をはじめとする『語絲』の同人は、日本古典文学に興味を感じつつ、その中に反映された時代を超える観点や、権威への軽蔑と反抗などの「現代性」を見出した。そこには、日本古典文学の翻訳・紹介を借りて中国の文学、劇曲、思想の変革に影響を与えようとする意欲が窺える。そして、中国での反日感情が高まる時期において、日本文学を通して、客観的に日本の国民性を検討し、中国人への自己反省を促す姿も見られる。

第三章「上海時期の『語絲』(1927. 12-1930. 3)での日本認識」では、本拠地移転の経緯を踏まえ、上海時期の『語絲』での日本認識を考察した。本拠地移転をきっかけに、編集長の交代や執筆陣の変化などの原因で、『語絲』の性格にも変化をもたらした。記事の数

から見ると、社会時評の割合が著しく減少し、代わりに文芸類作品の比重が大きくなった。そして文学翻訳の面では、北京時期での「純文学」を中心とする特徴と違い、上海時期では学術化の傾向が見られるようになったことを明らかにした。

第4巻『語絲』の記事の内容から見れば、北京時期の『語絲』に比べ、第4巻『語絲』に掲載された日本と関連がある社会時評が大幅に減少し、日本への鋭い批判はあまり見られなくなった。文化・文学に関する記事の中では、日本語作品に基づいた翻訳文が一番多かった。そして文学作品だけではなく、文学理論と研究論文の翻訳も少なからず掲載され、学術化の傾向が見られるようになったと考えられる。そして、第5巻『語絲』に掲載された日本と関連がある社会時評の数は少ないが、日本留学を背景として作った小説と随筆がいくつか存在している。それらの記事から見れば、実際に日本社会に触れた留学生であっても、日本に好感を持っているとは言えない。その原因としては、文化的差異のほかに、日中関係の緊張のため、中国留学生と日本社会との衝突が発生することもあったためと推測される。また、日本社会や日本文化に批判的な意見を述べていることから、この時期での中国留学生は、日本文化を理解することに積極性を欠いていたことも見て取れる。文化・文学に関する記事の面では、学術研究に関するものが多数を占めており、学術化の傾向がさらに強くなった。その中で、特に日本のロシア文学研究とプロレタリア文学へ強い関心を寄せている。それは当時中国文壇において革命文学が勃興している背景の下で、中国革命文学の発展の参考にするという目的があったと考えられる。また、魯迅が「革命文学論争」の渦中に巻き込まれたことも、第4巻と第5巻『語絲』でプロレタリア文学に関する記事が増えた一つのきっかけと考えられる。

北京時期と上海時期の『語絲』に表れた日本認識の考察を試みた結果、それぞれの時期で編集長を務めた周氏兄弟の影響が大きかったと言わざるを得ない。北京時期の『語絲』に表れた社会批判と文化交流の両立を行うという特徴は、周作人の対日姿勢と一致している。換言すれば、編集長である周作人の対日感情が複雑であったことにより、北京時期の『語絲』における日本認識と態度は多様性を見せていたと言えるだろう。上海時期の『語絲』に表れた日本に関する社会時評が大幅に減ったことと、日本文学翻訳の面で学術化の傾向があることは、魯迅の外国文学を借りて中国の国民性を改造して啓蒙する意図に深く関連すると考えられる。

第四章「1920年代における語絲社主要メンバーの日本認識」では、1920年代における魯迅、周作人、林語堂をはじめとする語絲社主要メンバー及び主要執筆者の個人的な日本認

識の考察を試みた。それによって、ある程度その時期での中国知識人の普遍的な日本認識を垣間見ることができると考えられる。以下、日本文化・文学、「国家」としての日本、日本の国民性という三つの方面からまとめたい。

まず、日本文化・文学に対する姿勢には、主に次の三つのタイプがある。第一に、周作人を代表とするタイプは、日本文化に強い親近感を抱き、個人的な趣味から情熱的に日本文学を紹介・翻訳したり、日本文化の研究を呼びかけたりした。第二に、魯迅を代表とするタイプは、第一のタイプと同様に豊富な翻訳成果を残しているが、日本文化・文学自体に対する評価はあまり高くなく、ただ先進思想を導入・宣伝する手段として、日本文学を架け橋やメディアとしか見なさなかった。第三のタイプは、中国や欧米文学のほうに注目しており、日本文学にはあまり関心を寄せない人を指す。林語堂、劉半農のような欧米留学経験を持つ知識人が第三のタイプに該当する。

次に、「国家」としての日本に対する姿勢には、主に二つのタイプがある。1920年代には、山東出兵や張作霖爆殺事件など、日本側が中国の政治、軍事への直接介入を行った跡が多く見られる。また、『順天時報』などのマスメディアを通して世論を誘導し、文化侵略を行った。それに不満を抱いていた中国知識人は、日本へ忠告したり、批判したりする記事を発表した。それは自らの反対意見を言うための他、日本の侵略的意図を見破り暴き、中国民衆に警戒を促すのも目的の一つである。その中で、単純に日本のことが気に入らない人は多数いた一方、周作人のような日中両国の相互理解に期待する人も存在している。もう一つのタイプは、魯迅のような日本関係の問題に対しては冷静な姿勢を崩さず、それに関する言説が少なく、中国国内のことを優先にする人である。

最後に、日本の国民性に対する認識について、多様な見解が見られる。日本の国民性の長所と言えば、人情味があること（周作人）、柔軟性があること（魯迅）や、比較的忠実に愛国心があり、団結して生存意志も比較的堅固であること（林語堂）などが挙げられる。また、日本人の模倣能力がうまいことは、当時多くの中国人に軽蔑されたが、模倣を欠点として捉えず、むしろ学ぶべき長所であると指摘したり、他国の精髓を吸収して自らのスタイルに再構築することに肯定したりする言論から、世論や日中関係に左右されず、客観的に日本の国民性を検討する中国知識人が存在したことがわかった。そして、日本の国民性の欠点と言えば、制限のない忠孝を提唱すること（周作人）、好戦的で頑固で熱狂的な一面があり、「合理的精神」が欠けていること（林語堂）などが挙げられる。他に、日本の精巧と虚礼を重んじる民族性によって、視野が狭くなり、日本の現代文学作品には個人

的な視点に拘り、深刻さと普遍性に欠けている傾向が見られるため、偉大な作品が存在しないと韓侍桁が指摘している。

五、不足点とこれからの展望

本研究は『語絲』の記事と語絲社主要メンバー・執筆者を糸口にして、1920年代における中国知識人の日本認識を垣間見たが、残された課題も数多く挙げられる。

まず、本研究において語絲社主要メンバー・執筆者の個人的な日本認識を考察したものの、取り上げたのは周作人、魯迅、林語堂、劉半農と韓侍桁の5人しかなく、取り上げた例文の数も充分だと言えない。より多くの『語絲』同人と記事を挙げれば、論文の説得力が高まるものとする。

次に、1920年代において、語絲社のほかに、新潮社、創造社、未名社など様々な文学団体があり、それぞれ同人雑誌を創刊して文学活動を行った。1920年代における中国知識人の日本認識をより全面的に把握しようとするならば、それらの文学団体と同人雑誌を分析する必要もあると考える。

そして、本研究は『語絲』同人が書いた記事を中心として考察を行ったが、それらの日本に関する言論や日本文学の翻訳に対して、読者、または『語絲』同人以外の知識人はどのような反応を見せたかについては論じられなかった。まだ考察する余地があるため、より広い範囲で記事を取り上げ、近代中国知識人の日本認識という課題を、さらに多様な観点から検討していかなければならないと考える。

論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏名	肖燕知
学位論文の 題名	1920年代における中国知識人の日本認識の展開 ——雑誌『語絲』を中心に——		
論文審査担当者氏名 (主査) 佐野正人 , 妙木忍 , 勝山稔			
<p>論文審査の結果の要旨（1,000字内外）</p> <p>肖燕知氏の博士論文「1920年代における中国知識人の日本認識の展開——雑誌『語絲』を中心に——」は、近代中国における知識人の日本認識をめぐって、特に雑誌『語絲』を主な分析対象にして論じたものである。</p> <p>雑誌『語絲』は、1924年に創刊された雑誌で、当時の中国の新文化運動から国民革命の時期にかけて魯迅、周作人、林語堂ら知識人たちの言論を展開する媒体となった雑誌であり、当時の文壇・論壇における影響力も大きかった。</p> <p>論文第2章と第3章では、『語絲』を対象に1924年から1927年の北京時期、1927年から1930年の上海時期とに分けて、日本に関する記事を整理し、大きく「政治・社会」に関するものと「文化・文学」に関するものとに分けて分析を行った。</p> <p>その結果、北京時期には編集長であった周作人の編集理念を反映して、日本の中国への軍事的・文化的介入を批判する「政治・社会」記事と、日本の古典文学の翻訳や紹介を広く行った「文化・文学」記事とがちょうどよいバランスを取っていることを示した。</p> <p>本拠地が上海に移り編集長も魯迅に変わった上海時期においては、そのようなバランスが崩れ、「政治・社会」記事が減少し、「文化・文学」記事が多数を占めるようになった。また、学術化の傾向も強まったことを指摘している。また、第4章では、『語絲』社の主要メンバーの日本認識についても整理している。</p> <p>終章では「日本文化に対する認識」、「国家としての日本に対する認識」、「日本の国民性に対する認識」をいくつかのパターンに分けて整理しており、それぞれ興味深い分析を行っている。</p> <p>全体として『語絲』に止まらず当時の他の雑誌などでの言論も含めた視点から丁寧な分</p>			

析を行っており、1920年代という「親日」と「反日」が相互に錯綜した日本認識のあり方を浮かび上がらせる論文となっていると評することができる。

審査委員会では、『語絲』社以外の文学団体への言及が足りない点や、日本側の機関誌とされている「順天時報」の時代的变化とその内容に留意すべきなどの意見が出た。しかし、本研究の1920年代の中国知識人の日本認識を幅広くまとめた成果は高く評価できるものである。

以上より、本研究は、論文執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力と学識を有する事を示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。